

<部会研究>

長時間保育が児童の心身発達に及ぼす影響に関する研究

——昭和43年度厚生科学研究——

共同研究者	研究第3部	松島 富之助
	研究第7部	野田 幸江
	(東京女子短期大学)	加茂 端江
	(横浜女子短期大学)	池上 キヨ
	(横浜市児童課)	山崎 田鶴子
	(東京都立高等保育学院)	鈴木 とく

I 緒

言

職業をもつ婦人は、年々増加し昭和43年10月の総理府統計局の労働力調査によれば給料生活者は約3825万人にのぼり、婦人労働者はこの中の約 $\frac{1}{3}$ の1015万人に達している。

このうち401万人(44.9%)が既婚婦人であり、しかも30才以上の婦人は、その中の30.4%を占め、今後さらに増加していくと予測されている。この婦人労働者の増大の背後的原因としては、企業の望む若年労働者不足を婦人労働で補う傾向が強いこと、農山漁村地域での労働力不足が母親の労働強化になっていること、は勿論であるが、婦人自体の働く権利の自覚、社会的地位の向上や社会的活動への意欲、又は社会的接触への欲求などが増加していることがあげられる。

働く婦人が多くなるにつれて、保育所の必要性が増大してきて、昭和42年12月、厚生省発表の「全国要保育児童実態調査」によれば、全国で約12000ヶ所の保育所に、97万人の小児が保育されているが、まだ約51万人の小児が保育に欠けているといわれる。

以上の如き量的不足に対する要求とともに、保育所の質的要求も増大してきている。その1つは、乳児保育の拡大要求であるが、この点については昭和43年度の厚生省の対策として、生後3ヶ月以後の乳児につき、保母の定員数を増し、保健管理者として保健婦又は看護婦を1名おくように措置され、今後更に拡充を計る趨勢にある。

他の1つは、長時間保育の要求である。もともと、小児保育は企業側の要求に応える婦人労働の解決方法とし

て出発したものであるので、労働条件は、働く側と企業との間の妥協で成立していることが多い。しかし、8時間勤務体制をとるのが一般であるので、通勤時間を入れると長時間保育への希望が多くの母親から提出されることは、しかたのない事実であろう。また特殊な形態の長時間保育として、第3次産業の夜間9～10時までの保育希望や、病院、産院などの準夜、夜間の勤務に対する保育希望も増大している。

翻って、小児の保育のあるべき姿については、昭和38年7月に中央児童福祉審議会保育制度特別部会の中間報告としての「保育問題をどう考える」の中で、第1原則として「両親による愛情に満ちた家庭保育」が根本となっている。とくに「2～3才以下の乳幼児期においては、まず家庭において保育されることが原則でなければならないし、それが不可能な場合においても親密で暖かい養護が与えられるよう処置を手厚くする必要がある」(第6原則)と述べられている。

小児が長時間に亘って集団保育される場合の、心身に及ぼす影響については、身体面では、感染が多発しやすいこと、をあげている学者が多いが、精神的・知的面では、乳児院などの昼夜保育では問題をもちやまいのに反して、昼間保育に於ては乳児に及ぼす影響は少ないと考えているものが多い。

しかし、長時間保育をされた小児の心身への影響については、報告がみられないようである。

そこで、我々は、長時間保育が小児の心身に及ぼす影響をみるために、次の点について調査研究が行った。

Ⅱ 調査方法

1) 長時間保育の実態調査：東京都、神奈川、埼玉、千葉、茨城、群馬、栃木の各県における長時間保育の実態と、保育の「長時間保育の小児に与える影響の意識調査」を行った。

2) 幼児の行動調査：1) のデータに基づき、保育所における3才児の行動調査を、長時間保育児（A群：2年以上の長時間保育群、B群：1年以内の長時間保育群）普通保育児（C群：2年以上の普通保育群、D群：1年以内の普通保育群）について、比較検討し、異常行動の発生状況に差があるか否かをみた。

3) 幼児の疲労調査：上記2) の対象児について疲労調査を行った。（検査項目：色分けテスト、片足跳、けんすいの項目、及び罹病傾向、体重増加率について）

4) 幼児の家庭におけるタイムスタディ調査：上記事項の調査結果を支配する因子として、保育所における保育内容と、家庭での母親の小児への接し方が考えられるが、我々は、保育所を出てから、翌日来所するまでのタイムスタディを行い、母親が小児の疲労解消へ、どのような努力を行っているかを知らうと試みた。

Ⅲ 調査成績

1. 関連5県における長時間保育の実態調査結果

池上キヨ、山崎田鶴子

i) アンケートの回収率は平均63%(77.3%~44.7%)
ii) 8時間の基準をこえて保育を行っているものは、解答した659施設中405施設(61.5%)であり、最高は埼玉、茨城の72・75%から、最低は千葉、群馬の53%に分散している。

iii) 長時間保育児は、405施設中、4910名で1施設当たり平均12.1名で、施設定員数の9.3%を占めるが、県別に差がみられ、埼玉、茨城(14.1%、12.2%)では高く、千葉、栃木(6%、8%)に低い。

iv) 長時間保育児の時間的分析：9~10時間が53.3%と多く、ついで8~9時間が24.4%、10時間以上が22.3%であり、とくに、10時間以上の保育は、3才未満児(27.2%)に多くみられる(3才以上児21.0%)。

v) 保育内容は、自由遊びが50%以上を占め、T・V絵本などをみせるものが20%であったが、条件を整えた一斉保育(お話、紙芝居、ゲーム、絵画製作など)は10%にすぎなかった。

vi) 保育の主観による長時間保育の影響の有無

④返信のあったアンケート807通のうち：長時間保育が小児に影響ありと答えたものは、313通(38.8%)影響なしと答えたもの、269通(33.3%)、解答なし225通(27.9%)であった。

⑤問題ありの内容：延べで約100項目にわたり、描象的な表現としては、欲求不満、情緒不安定(各25づつ)があり、具体的なものとして最も多くあげられたものは、淋しそう(56)、甘える(50)、落

つきがない(49)、乱暴する(39)、よく泣く(33)、いらいらする(25)等である。

2. 幼児の行動調査成績

i) 各群間の差を比較すると、A、D群間にその差が最も強くみられた。

ii) その内容は、「ぐずる」「すねる」「消極的である」「いじわる」「他人の注意をひきたがる」「我がつよい」「けんかっ早い」「きまった子どもとしか遊べない」「独占欲が強い」「我慢強くない」「協調性に欠ける」の11項目である。

即ち、有意差のある項目は何れもマイナスの意味をもつ行動面にみられ、プラスの意味の行動面では、「片づけをよくする」の1項目にすぎなかった。

3. 幼児の疲労調査成績

松島富之助 野田 幸江
加茂 瑞江

(1) 実験の計画

A 疲労の定義

長時間保育の心身に及ぼす影響を考えた場合、プラスの影響と、マイナスのそれとが考えられるが、ここでは仮説的に、疲労を影響の主たるものとしてとりあげてみた。

その場合、どのような状態を疲労と考えるか、まず疲労の定義が明確でなければならない。古くから様々な定義づけはあるが、本研究では一般には、身心の継続的活動によって生ずる身心機能の低下の現象と定義したい。

なお、ここでは、その疲労を便宜的に身体的疲労と、

精神的疲労とにわけて研究を進めることにした。その場合、疲労の原因となる活動が、身と心のいずれであるかを問わず、身体的機能の低下を身体的疲労、精神的機能の低下を精神的疲労としたい。

しかし、疲労そのものが、本研究の測定の対象なのではなく、「主とし客観的に測定される種々の現象」を知り、それが幼児の人格形成にどのような意味をもつかを考察することにねらいがある。

B 実験項目の選択

以上の定義によって、疲労を測定する客観的な方法も様々あるが、現実の事態に直面した場合、その疲労の本能が不明確となり、種々の疲労測定法間に一致を見出すことがむずかしい。

それに加えて、今回の研究対象が幼児であるため、従来の測定法をそのまま適用することが、ますます困難と

なる。

そこで、本研究では持久力と集中力の2点に限定し、前者に関しては懸垂と片足とびによる主として身体的疲労を、後者に関しては色わけ作業による主として精神的疲労の測定を実施することにした。これらの点は、幼児の人格形成にも重要な影響を及ぼす要素の1つであると考えられたからである。

(2) 身体的影響

〔1〕 測定方法

a) 片足とび：片足で連続してとび、片方の足を地におろすまでの時間をストップウォッチで測定した。立ちどまった時も中止とみなす。(単位 秒)

b) けんすい：鉄棒または横木にひじを伸ばしてけんすいし、けんすいできなくなって手をはなすまでの時間を、ストップウォッチで測定する。(単位、秒) 鉄棒の

第1表 対象幼児群の身体的プロフィール

群		A		B		C		D	
		長 時 間 > 保育		長 時 間 > 保育		正 規 時 間 > 保育		正 規 時 間 > 保育	
N		11		11		10		15	
年 令	平 均	3才10カ月		4才0カ月		4才2カ月		3才11カ月	
	分 散	3才6カ月～4才2カ月		3才10カ月～4才4カ月		3才8カ月～4才6カ月		3才7ヶ月～4才5カ月	
保 育 期 間	平 均	24.8カ月		10.3カ月		31カ月		10.1カ月	
	分 散	21～31カ月		8～11カ月		23～36カ月		9～11カ月	
保 育 時 間	平 均	9時間15分		9時間16分		7時間40分		7時間30分	
	分 散	9.00～10.00		9.00～10.00		7.0～8.0		6.50～8.0	
		男	女	男	女	男	女	男	女
身 長 (cm)	N	3	8	2	6	4	6	6	8
	平 均	96.1	95.0	96.4	99.7	103.3	97.5	98.1	93.7
体 重 (kg)	N	3	8	2	9	4	6	6	9
	平 均	15.2	14.6	13.75	15.0	15.4	15.6	15.2	14.1
最 近 1カ月の	平均の 体重増加 率	+0.17kg		+0.30kg		+0.21kg		+0.09kg	
	増 加 の 分 散	+0.8～-0.6kg		+1.0～-0.5kg		+0.5～-0.15kg		+1.3～-0.5kg	
罹 病 (休 園 傾 向 度)	N	11		11		10		15	
	年間殆ど休 まぬ	3		5		6		6	
	1X休園 2.3カ月	2	45%	3	73%	3	80%	3	60%
	1-2X休園 月	3		2		2		4	
	3-4X休園 月	3		1		0		2	

高さは、幼児のつま先が地面に届かない程度にする。つかまらせると同時に台をとり去る。

〔2〕測定結果

1) 調査対象児の身体的プロフィール

対象幼児を4群に分け、A群(長時間、長期間保育児11例)、B群(長時間、短期間保育児11例)、C群(正規時間、長期間保育児10例)、D群(正規時間、短期間保育児15例)の間の身体的なプロフィールを表にまとめた。

①年齢：各群ともに3才6カ月～4才6カ月の間の幼児が対象として、平均、3才10カ月～4才2カ月であった。

②保育期間：A群では、平均24.8カ月(21～31カ月)、B群では10.3カ月(8～11カ月間)、C群では、31カ月(23～36カ月間)、D群では、10.1カ月(9～11カ月)であった。

③保育時間：A、B群は長時間保育群であり、平均9時間15分(9～10時間)であった。対照群のC、D群は正規時間保育群であり、平均7時間30分～40分(6.50～8時間)であった。

④身体発育

a) 身長：各群とも、男児の平均は、96.4～103.3cmで、C群の男児が大きい他は、ほぼ同様である。

女児では、身長の平均値はB群が99.7cmで最も大きく、ついでC、A、D群の順であった。(97.5～98.7cm)

b) 体重：男児では、A、C、D群ともにほぼ同じぐらいで(15.2～15.4kg)であったが、B群はやや小さいものが多かった。(平均13.75kg)。

女児ではC、B群それぞれ(15.6kg：15.0kg)でA、B群よりも平均的には重かった。(A群14.6kg：D群14.1kg)

⑤最近1カ月間の体重増加の平均

B群が最も体重増加が著しく、1カ月平均300gの増加であり、ついで、C群(+210g)、A群(+170g)、D群(+90g)の順であった。

体重の増加は健康のシンボルであるが、各群ともに、個人差が大きく、最高の増加は、1.3kgに及び、最小は0.6kgの減少を示していた。

この体重の減少は、風邪及び伝染病(麻疹、水痘、風疹、流行性耳下腺炎など)の感染によるものが多く、特に入園して期間の短い群(とくにD群)に於ては、これらの疾患による体重の減少が多いのではないと思われる。

⑥罹病傾向：

各群間における。幼児の罹病傾向を疾病による休園回数を指標として調査した結果(第1表下段)、2～3カ月に1Xの休園を含み、年間殆んど休園しないものは、A群では、11例中5例(45%)、B群11例中8例(73%)、C群10例中8例(80%)、D群15例中9例(60%)であり、C、B、D、A群の順になった。

反対に、月に1～2X以上休園するものは、A群に最も多く、ついでD、B、C群の順である。

例数が少ないが、この意味づけを行ってみると、罹病に及ぼす因子には、⑥体質が丈夫か否か、⑥疲労の多寡(通園距離、在園時間、睡眠時間など)、⑥免疫の多寡(伝染病などの感染を多く受けていたか、否か)があげられる。

保育所へ通いはじめの半年位の間は、集団生活に入ったために、風邪や伝染病によくかかる報告が多いが、もしそうならばB、D群は感染の多発による休園が多くてもよいことになる。

我々の調査では、B群は休園が少いものが多く、D群は、やや多い傾向にあり、通園期間との関係は明らかではなかった。

次に、疲労が関係しているとするれば、長時間保育群(A、B群)の方が正規時間保育群よりも感染が多発してもよいと考えられるが、A群に於ては明らかに休園の多いものが多いが、B群は、それ程でもない点で決定的ともいえないであろう。

次に、体質傾向との関係は各群ともに虚弱児と健康児が混在していて、しかもその比率がよく判らぬので、決定的な関係はみられなかった。

結論的にいえば、休園頻度は長時間、長期間保育群であるA群に最も多く、ついでD群であり、B、C群は最も少なかったが、その理由は、よく判らなかつた。

2) 持久力測定結果

長時間保育が、幼児の持久力に影響を与えるか否かを知る目的で、A、B、C、D群につき、入所時と退所時に、それぞれ、片足とび、けんすいの持続時間を測定した。

a) 片足とび

④ 退所時と入所時の差の平均(秒)：

退所時の片足とび(b秒)―入所時の片足とび(a秒)を求めたが、この値が+にできれば、退所時の方が長時間行ったことになり、-になれば短時間行ったことになり、これを持久力の比較のIndexに用いた。

この差の平均は、長時間保育群であるA、B群に於ては、退所時に低下を示し、正規時間保育群であるC、D群では、退所時の方が高いことを示していた。とくに、A群は、-1.5秒と最も短縮し、ついで、B群の-0.2秒、C群は+0.7秒であり、D群は+2.3秒と最も長かつた。

第2表 幼児の持久力テスト成績

群	片 足 と び					け ん す い				
	A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
N	9	8	9	14	40	11	11	9	14	45
退所時 (a) 入所時 (b) の差の平均 (秒)	-1.5	-0.2	+0.7	+2.3		-0.6	-4.2	+1.2	-6.6	
分 散 (秒)	+7~-5.5	+17~-22	+11.5~-4.1	+10.8~-3.9		+16~-15.8	+15~-33	+18.6~-38	+24~-49	
※ ±30%	N	3	2	5	6	5	1	3	5	14
	%	33	25	56	43	45	10	33	36	
※ -30% ~ -50%	N	2	1	1	2	2	0	1	4	7
	%	22	12.5	11	14	18	0	11	29	
※ -50% 以上	N	3	1	0	0	1	5	1	3	10
	%	33	12.5	0	0	9.5	45	11	21	
※ +30% ~ +100%	N	0	2	2	1	1	5	2	2	10
	%	0	25	22	7	9.5	45	22	14	
※ +100% 以上	N	1	2	1	5	2	0	2	0	4
	%	11	25	11	36	18	0	22	0	

例：A子

片足とび 入所時11秒、退所時6秒 → $\frac{a}{b} \times 100 = 55\%$

(a) (b)

 $M = 100 - 55 = -45\%$ ※ $X = \left(\frac{b-a}{a} \right) \times 100\%$

た。

即ち、片足とびに於ては、長時間保育児の方が退所時における短縮が著しくあらわれたが、このことは、疲労と関係があるかもしれない。

⑤ 退所時の片足とび (b) に比べて、入所時の片足とび (a) の占める% $\left(\frac{b}{a} \right)$ が、入所時の片足とびからの位づれているか？ $X = \left(\frac{b-a}{a} \times 100 \right) \%$

(a) と (b) の比較を行う方法として、上記の式を考案してみた。即ち、持久力の変化が退所時にあらわれるとすれば、入所時からのずれの程度を表わすことが必要であろう。

例 ① A子、片足とび、入所時 (a) 11秒、退所時 (b) 6秒 → $\frac{b}{a} \times 100 = 55\%$ 、即ち 55% 減少している。

入所時を 100% とすれば、入所時からのずれ

は、

 $X = 55\% - 100\% = -45\%$

② B子：片足とび、入所時 (a) 4秒、退所時 (b) 11秒 → $\frac{a}{b} = +270\%$ 、即ち、2.7倍となる。

入所時を 100% とすれば、

 $X = 270\% - 100\% = +170\%$ となる。

この値が入所時の値 (0%) から何%ずれているかを比較すればよいことになる。

しかし、「片足とび」や「けんすい」を同一人で、2回行ったとき、どの位ずれると異常かと決める尺度は、まだ決められていない。

そこで、著者は入所時からの、ずれが±30%以内にあるものを、一応正常範囲ときめてみた。

この根拠としては、小児の体重の、ずれが標準よりも20%以上になると肥満又は、栄養失調症といわれるが、身体的に著しい異常が出はじめるのが30%を越えた場合である点を参考にした。身体的異常と、片足とびや、け

んすいを同一の尺度におさめてよいか、どうかは不明であるが、一応の尺度になりそうに考えたのである。

この値を5群に分けて、“±30%群”(正常群)を中心に、減少群は“-30~-50%群”と“-50%以上群”に、増加群は、“+30~+100%群”、“+100%以上群”に分類した。

減少%と増加%が異なるのは、増加%に比べて、減少%の方が小さく現われやすいからである。

(例: $a = 3$ 秒、 $b = 2$ 秒とすると、 $\frac{b-a}{a} \times 100\%$
 $= -33\%$ になるが、 $a = 2$ 秒、 $b = 3$ 秒とすると、 $+50\%$ となる)

成績(第2表参照)

① 正常範囲にあるのは、C、D群が多く(夫々56% 43%)、A、B群は少い(夫々33%、25%)

② 減少の著しい群は、A群であり“-30%以上”の減少は9例中5例(55%)にみられ、しかも-50%以上が多いのに反して、B群では、8例中2例(25%)と少く、とくに、C、D群は極めて少く(C群9例中1例(11%) D群では、14例中2例、(14%))、しかも軽度のものばかりである。

③ 増加の著しい群は、D群であり、14例中30%以上が6例(43%)で、しかも+100%以上例が36%も占めていた。

以上の結果から、片足とびの退所時の減少は、長時間、長期間保育群(A)に著しくみられ、反対に正規時間、短期間保育群(D)では、退所時における片足とびの延長がみられ、B、C群は、この中間の値を示したが、このことは片足とびのように、持久力と集中力を要する運動は長時間保育では低下することを示唆しているものと思われる。

b) けんすい

④ 退所時と入所時の差の平均(秒)

この差の平均は、A、B、D群に於ては、退所時に低下を示し、C群のみが増加を示した。

最も低下の著しいのは、D群の-6.6秒であり、ついで、B群の-4.2秒であり、A群では-0.6秒と僅かの減少、C群は+1.2秒と僅かに増加している。

即ち、短期間保育群であるB、D群では退所時における、けんすい持続時間が短縮していたが、長時間保育群であるA、B両群間にはかなりの差がみられるので、長時間保育が、けんすいに及ぼす影響は、よくわからなかった。

⑤ 退所時のけんすい時間(b)に比べて入所時のけんすい時間(a)の占める%($\frac{b}{a}$)が、入所時のけんす

い時間からどの位ずれているか? ($X = \frac{b-a}{a} \times 100\%$)

片足とびの時と同様にして分析した。

成績(第2表)

① 正常範囲内にあるのは、A群に最も多く(45%) ついで、D(36%)、C(33%)群であり、B群(10%)は最も少ない。

② 減少の著しい群は、B群(45%)であり、ついで、D群(21%)であとのA、C群は少ない。

③ 増加の著しい群はC(44%)、B群(45%)である。

以上の結果から、退所時のけんすい時間の変化は、短期間保育群であるB、D群に減少が多くみられたが、長時間保育群であるA、B群に共通の因子はみられなかった。

もともと、けんすいは持久力テストにはなるが、個人差が大きく、とくに3才児では変動が大きいといわれるが、これらの特質が、A、B、C、D群の間に明かな差としてみられなかった原因であると考えられる。

〔3〕小括と並びに考察

3才保育児を、A群(長時間、長期間保育児、11例)、B群(長時間、短期間保育児、11例)、C群(正規時間、長期間保育児、10例)、及び、D群(正規時間、短期間保育児、15例)の4群に分け、入所時、退所時における持久力テストを、片足とび及びけんすいについて検討した。

① 片足とびにおいては、長時間保育群がA、B群ともに退所時における平均、持続時間の減少が著しく、しかも、減少率の大きいものが多くみられた。

しかし、けんすいにおいては、この傾向はみられなかった。

罹病傾向は、長時間保育で長期間保育群(A)に、風邪などを多発して休園するものが多い傾向がみられたが、正規保育時間短期間保育群(D)にも、この傾向があり、長時間保育に多い傾向はみられなかった。

(3) 心理的影響

〔1〕測定方法

まぜあわされた赤、ピンク、黄の色板、各100枚を同色の容器の中に分類投入させる作業であり、問い方は、まず検査者が、まぜられた色板を1枚づつとりあげ、各色2枚づつ範を示した後、出来るだけ早く同じようにするよう指示する。30秒間以上、作業が停滞した場合は、それまでの結果を記入した後、作業を続けるよう催促する。

記入事項は、作業が完成した場合は、所要時間、及び

第3表 登園時及び退園時における個人別作業成績

A群

	登園時	退園時	変化なし	⊕の変化	⊖の変化
1	中 止	中 止			○
2	中 止	時 間		○	
3	中 止	中 止			○
4	中 止	中 止		○	
5	時 間	完 成		●	
6	時 間	中 止			●
7	時 間	中 止			●
8	完 成	完 成		○	
9	時 間	中 止			●
10	完 成	完 成		○	
11	完 成	完 成	○		

B群

1					
2	完 成	完 成		○	
3	完 成	完 成		○	
4	時 間	時 間		○	
5	時 間	完 成		●	
6	時 間	時 間			○
7	完 成	完 成			○
8	時 間	中 止			●
9	中 止	中 止			○
10	時 間	中 止			●
11	完 成	完 成			○
12	完 成	完 成		○	
13	完 成	時 間			●

C群

	登園時	退園時	変化なし	⊕の変化	⊖の変化
1	中 止	中 止		○	
2	完 成	中 止			●
3					
4	完 成	完 成		○	
5	完 成	完 成	○		
6	完 成	完 成			
7	完 成	中 止			●
8	完 成	中 止			●
9	完 成	時 間			●
10	時 間	完 成		●	

D群

1	中 止	中 止			○
2	完 成	完 成	○		
3	完 成	完 成	○		
4	完 成	完 成		○	
5	中 止	中 止			○
6	時 間	時 間		○	
7	完 成	中 止			●
8	完 成	完 成			○
9	完 成	完 成	○		
10	時 間	時 間		○	
11	完 成	完 成			○
12	中 止	中 止		○	
13	時 間	中 止			●
14	完 成	完 成		○	
15	完 成	完 成		○	

誤りの数を、作業を途中で中止した場合は、作業の持続時間、作業量、誤りの数について測定したものを記入する。
なお、作業開始後15分を経過しても作業が完成されな

い場合は、15分で作業を中止させた。それは、他のことに気をとられやすい、この年齢の子どもが、意識を集中して作業をやり終えるのに要する時間を15分位と考えたからであり、それ以上は、要した時間で考察を加えるよ

第4表 登園時及び退園時における作業完成児数

群	登 園 時		退 園 時	
	完成させたもの	完成させなかったもの	完成させたもの	完成させなかったもの
A	3	8	4	7
B	6	6	6	6
C	7	2	4	5
D	9	6	8	7

第5表 検定結果

	A 長期間・長時間	B 短期間・長時間	C 長期間・短時間	D 短期間・短時間
A 長期間・長時間		有意差なし	あり 5%	あり 1%
B 短期間・長時間			あり 5%	なし
C 長期間・短時間				なし
D 短期間・短時間				

り、一応そこで中止させ、そこまでの作業量で結果を処理した方が、実験の目的である集中力をみるに適していると考えたからである。

〔2〕測定結果及び考察

作業の結果を、①「完成」したもの、②15分の「時間」ぎれのもの③途中で作業を「中止」したものの3つにわけ、まとめたものが、第3表である。

まず作業を完成させたものについてみると次に示す第4表のようになり、各群の間の差を χ^2 検定した結果は次の通りである。

第5表より次のことがわかる。

① A群に於て作業を完成させたものが少なく、D群との間に一番差が認められる。

② 長時間保育を受けているものは、保育を受けている期間の長短には影響をうけていない。

③ 長期間、保育をうけているものは、保育時間の長短による影響をうけている。

④ 保育を受けている期間が短期間であれば、長時間か否かの時間的差の影響をうけていない。

⑤ 普通保育を受けているものは、その期間による

差の影響をうけていない。

即ち、保育時間と保育期間がお互いからみあい、影響を与えていると考えるべきであり、長時間保育を考える場合、それを必要とするものであればある程、長期間の長時間保育を必要とすることからも、今後更に解明されねばならない問題であろう。

次に、退園時の結果についてみると、いずれも登園時の成績と統計的に有意な差は認められないが、①完成させた人数に於て、A、B群では殆ど変化がみられないのに比し、C、D群では、特にC群に於て、完成させたものの数が登園時の半数近くになっていることがわかる。又、退園時に於ては、A、B、C、D群間にいずれも有意差が認められないことがわかる。以上のことから、普通保育児では、特に長期間にわたる普通保育児が登園時にくらべ退園時にやや成績の低下がみられるのに対し、長期間長時間保育を受けている者では、登園時、退園時の成績が、殆ど変化していない。しかも、退園時に於ては、成績が低下したとみられるC、D群に対し、有意差を認められないところから、ここでも長時間保育の影響は、その日のうちにみられる一過性のものより、むしろ、持続され、固着されるものではないかとの疑問を持たせるものである。この問題についても、更に例数を増し、検討が加えられなければならないであろう。

更に、個人の変化についてまとめたのが第3表の右欄である。登園時、退園時の作業量作業態度に於ける変化の有無を示したものであり、変化なしは両者間に差の認められなかったものであり、⊕の変化とは、退園時に於いてプラスの変化を示したもので、⊖の変化とは同じくマイナスの変化を示したことをあらわすものである。なお○印のうち●印は先に示した三つの段階、即ち①完成させたもの、②時間ぎれ、③中止のうち異なる段階に移動したものであり、○印は、同じ段階、即ち登園時、退園時共に「中止なら中止の段階」で変化を示したものである。この同段階に於ける変化の有無の規準は、測定した時間、量、誤数の3つの因子のうち2つ以上についてマイナスの値をとったもの、及び時間については1分間以上を、量については30枚以上を差と考えたものである。その根拠は、全結果を通じて、時間に於ては、4～5秒の差のあるものと、1分以上の差のあるものとはっきりわかれ、その中間の値をとるものがなかった為であり、量についても同じことがいえ、便宜的に決めたものである。

このように個人の変化をとらえてみると、各群間に差を認める事は出来ない。ただ⊕の変化をしたものと、⊖の変化をしたものとは、⊖の変化をしたものに、段階

をこえる変化を示したものが各群とも多い傾向にあることがわかる。これは、プラスの変化の場合、同段階内の変化は、作業に対する慣れとも考えることができるであろう。

ただ、検査をおこなったものの報告によると、退園時の方で、検査者に対する慣れからか親和的態度で接するものが多かったということであり、例数の少ない。しかも、ただ1回の作業結果の中に、それ等の問題がどう反映されているか、その点をふまえての研究がなされなければならないであろう。特に長時間保育児の場合、退園時の作業は、むしろ相手をしてくれる人の存在が、はげみになることも考えなければならない問題であろう。

我々も作業を計画するにあたり、その点の事を考え、同一の被験者に何回かの作業をさせることも考慮したが、通常の保育の行われているなかで、全員に同じような作業をさせ得るならともかく、ある特定の子供のみに、何回か特別な事をさせることの本人及び他に及ぼす影響を考え、被験者を多くし、作業は1回と決めたが、前にもふれた様に、被験者選定の手違いから、結果に検討を加えた対象児数が少なくなり、結論というより、問題提起に終わってしまった感が深い。今後更に掘り下げねばならない問題のいくつかはひろえたのではないだろうか。

4. 幼児の家庭でのタイムスタディ

鈴木 とく

(1) 調査方法

I) 条件：長時間保育児が、長時間の集団生活から何らかの影響をうけて、身体的、精神的に疲労その他のことが見られるとするならば、保育時間終了後、家庭の生活に於て、普通保育時間（8時間又は8時間以内）の幼児と違った生活行動や態度が見られるのではないかと、又その母親は、長時間手離しているが故の家庭保育に於ける特別な配慮がありはしないか、という考えから、A、B、C、D群について、家庭調査を試みた。

II) 内容：調査用紙により、保育園から出る時間から、習朝登園するまでの間を次のように大まかに分けて、その生活時に表われるであろう子供の生活様相と、母親の態度を想定して夫々項目をあげた。外に参考のため、母親以外の家人の態度及び、時間を追って母親の生活内容も記入するようにした。

生活の主な色分けは、

○ 降園途次

○ 帰宅後夕食まで

○ 夕食時から夕食後

○ 就寝の仕度から眠りに入るまで

○ 夜中

○ めざめから朝の身仕度

○ 朝食時から家を出て登園の途次

である。

子どもの生活様相については、長時間集団生活をするため、疲れているとすれば、身体的に要求すること、疲れから来るいろいろな普通ながままと表現される要求をあらわすことなどについて、3才児保育の経験から、各区分に夫々3才児のとりそうな行動や態度をあげてみた。

III) 方法：調査の方法は、A、B、C、D群の各母親自身に記入してもらった。（人数は前述調査と同じ）。

集計の数の上から推察されることを次にのべたい。（母の生活時間及び内容、他の家族の態度は全然参考とせず、専ら子どもと母のみのそれによる）。

(2) 調査結果

I) 子どもの生活行動及び態度と、子どもに対する母の態度

A) 帰宅時の様子

手を引いてもらうは、A、B夫々半数及半数以上で、C、Dは $\frac{1}{3}$ である。これを、母側の気持の動きである＜手をひいて歩く＞を見るとA、Bは $\frac{1}{2}$ で、Dは半数以上である。これは親子両方の気持の動きは、A、B群とC、D群と大差はない。が、＜ひとりて歩こう＞とする子どもは長時間、長保育期間児に少い。

帰途、ぐずったり、物をねだったりすることについてはあまりみられず、4群とも、＜たいいてい気嫌がよい＞がBを除いて過半数である。

母親の夕食仕度中は、ひとりて遊んでいる状態が見られ、割合はAがすぐれている。このかげの母親の態度として、＜時々声をかけてやる＞ことや、食べたがる、何か食べさせておくと言う両者の要求と応えがみられる。

B) 食事の準備及び食事中

食事中はどの群も気嫌がよく、食事中わがままを言ったり、ねむくなる子どもは、Dにすこし、みられるだけである。食後は父又は母、兄など誰かに遊んでもらっており、母は、片づけをせず遊んでやる者と、自分のしごとをしてしまう者とAは半々、B、C、Dは片づけや自分のことをする方が多い。

C) 就寝時

就寝のための生活については4群ともとりたてて言うほどの差はなく、あらわれた数字からの推察では、かなりよい習慣がつけられている。ねむるまで何かしてくれと要求する者がAに少数みられ、母側にも、こちらからしてあげて眠らせるというのが半数みられる。

夜尿のための目ざめと、時々失敗は両方を合わせる
とA、B、C群に多いが、これを長時間保育と結びつけ
て考え得る否か疑問でもあり、個別調査も必要とする
ので、今後の研究に待つより外ない。

D) 起床時

めざめの、母の態度は両者ともマイナスと考えられる
点はみえず、着替えについてはA群は母子共、してやる
してもらうの関係が見られる。洗顔、歯みがきは、A、
B群に、してもらうが多くみられるのは、母の出勤時の
気ぜわしさから、母側にしてやるが多く、それが、
してもらう気持ちに続くものと考えられる。

E) 朝食

朝食はふつうに食べる(子ども)、いつしよに食べるよ
うにする(母)がAに多く、Dに食べたがらない子が多
くみられるのは、様々な憶測が試みられる点である。最
近、世に言われている。児童の朝食ぬきの状態はこの調
査の限りあらわれていないのは、親も、子どもの年令、
その健康を考えている為であろうが、そのことのみの大
がかりな調査ではないので、何とも言いがたい。が、朝
寝、めざめの規律性のあらわれが朝食にも及んでいて
のではないかと推察される。

家を出る時の気持は殆ど全員に近く良好で、A、B群に、
わずかに、ぐずぐず言う子どもがめられるだけである。

II) 小児の家庭における睡眠時間

Time Study にあらわれたが小児の睡眠時間は第6
表の如くである。

即ち、睡眠時間は、A、B群では9時間例が最も多い

第6表 家庭における睡眠時間

	A	B	C	D
平均睡眠 時間(時間)	9 ³⁰ 時間	9 ²⁸ 時間	10 ⁰ 時間	10 ⁰⁵ 時間
睡眠時間 の例数	8~9 時間	0	1	0
	9~10 時間	8	5	2
	10~11 時間	2	1	2
	11~12 時間	0	0	1
計(例)	10	7	5	10
平均年令	3才9ヵ月	4才0ヵ月	4才2ヵ月	3才8ヵ月

のに反して、C、D群では10時間例が最も多くみられ
た。

3才児では、1日平均11~12時間を必要とするので、
この9~10時間の睡眠では不足することになる。家庭児
では3才になると、ひるねをしないものが多いが、これ
は夜間の睡眠時間を充分とっているためである。

保育所では午睡の時間が充分でないと、疲労が残るこ
とは充分に考えられる。とくに長時間保育児群に9時間
しか睡眠をとらぬものが最も多かったことは、小児の心
身発達にマイナスの影響を与えることが、うかがい知れ
よう。

そして、その結果が、長時間保育児にマイナス的行動
をとるものが多く、しかも退所時の持久力集中力の低下
しているものが多くみられたと考えられよう。

(3) 小括並びに考察

1) 以上のことから、幼児の生活行動、態度や小児に
対する母親の態度には、8時間保育群と長時間保育群の
間に、きわだった差はみられなかった。

ただ、保育時間の長い幼児の母は、それなりに子ども
に対する思慮深い心づかいがされているのではないかと
思われる。たとえば、帰途途中、手をひいたり、話した
り、いっしょに歌ったり、食事の支度中、時々ひとり遊
びに声をかけたり、あまり空腹にならぬよう何かを少量
食べさせたり、ねむりにつくまで、そばにいてあげたり
何かしてあげようとしたりなど、子どもとの接触をつと
めてするように、しているのではないかと考えられる。
これは、家庭保育上普通のことであるが、こうした母
の心づかいが、長時間保育のマイナスの影響が顕著にあ
らわれていない原因ではないだろうか。

数的に少い対比群での考案では、はっきりしたことは
出にくい、もし長時間(と言っても1時間から2時間
位の差では)保育のためにあらわれるマイナスの影響が
少いとすれば母の家庭保育における心づかいに支えられ
ているものと言っても過言ではあるまい。

2) 幼児の睡眠時間が一般に短いものが多く、とくに
長時間保育群が著しいことは、疲労の回復をおくらせる
とともに、疲労の蓄積をまし、そのことが、退所時の集
中力、持久力の低下を来たしている原因となっているの
ではないかと考えられ、更に多数例について、適正な睡
眠時間がとられているか否かを検索する必要がある。

IV 考

按

1) 保育所に対する国民の Need
近年働く婦人の数が増大し、緒言でのべた如く、昭和

43年10月総理府統計局の労働力調査によれば、婦人労働
者は1015万人に達し、既婚婦人はその約45%の401万

第7表 各国の保育所数 S. Sjölin¹⁾

国名	集計年度	収容小児の年齢	保育センターの数	保育所数	この年令児のその総数	小児1000人対保育所数
日本	1968	0~6		12,542	11,317,000	1
オーストリア	1960	0~7	1,419		840,000	
ブルガリア	1960	0~3		10,000	531,000	19
デンマーク	1958	0~3	118	4,075	260,000	18
フィンランド	1959	0~3	112	3,280	333,000	10
フランス	1956	0~3	450	14,910	3,111,000	5
東ドイツ	1960	0~3		71,717	1,072,000	67
ノルウェー	1960	0~3	31	743	237,000	3
	1960	4~7	62	2,033	182,000	116.6
ポーランド	1958	0~3	919	49,194	2,185,000	22
スウェーデン	1962	0~7	276	11,369	745,000	15
英国	1956	0~5	1,011	30,930	4,642,000	7
ソビエト	1959	0~3		1,208,400	36,181,000	108
	1959	3~7		2,671,000		

人を占め、しかも30才以上の婦人はその30.4%に相当する122万人である。

既婚婦人が多ければ、その小児を保育する施設の要求は強まるのは当然のことであり、昭和42年12月、厚生省発表の「全国要保育児童実態調査」によれば、全国で12,542カ所の公私立の保育所に、966,880人の子供が保育されているが、まだ約51万人の小児が保育に欠けているといわれる。それらの小児は、無認可保育所その他で保育されているが、知能が爆発的に発達する乳幼児期の適正保育が、質的にも量的にも満たされることを希念することは、働く母親ばかりでなく、小児の資質の向上を期待する政府や企業にとっても共通のことといえよう。

(2) 小児保育に対する保育所の質的量的使命
保育所における小児の保育は社会への適応の過程を正しくとらせ、心身の健全な発達を目標とするものであるが、我が国の現状には質的量的に種々の問題がある。

① 量的な問題

イ. 各国保育所数：S. Sjölin¹⁾はWHO Public Health papers (24) のCare of children in day centresの中で、(Care of Well children in day-care centres) 世界各国の保育所現状をのべているが、第7表の如く東欧圏の国々(ソ連、東ドイツ、ポーランド、ブルガリア)では、その国の政策もあって保育所数が非常に多く、西側の諸国の中では社会保障制度の高度に進んでいるデンマーク、スウェーデンに多くみられ、ついで、フィンランド、イギリス、フランス、ノルウェーの順である。

我が国の保育所数は、0~6才の小児1000人に対して平均1カ所となり、西欧の国の約 $\frac{1}{10}$ にすぎない。この理由としては、「小児は家庭で保育される」という伝統がまだ生かされているともいえるが、更に分析すれば、保育行政が、世の中のNeedにはるかに立ちおくれていることになる。

前記の厚生省の保育児童実態調査のデータをもとにすれば、保育必要児数は148万人となり、これに要する保育所数は推定19,100ヶ所であるから、今後、約6,500ヶ所の保育所の設立をせねばならない。しかもこれだけ建設しても、その年令1,000人対の保育所数は1.7にふえる程度であり、今後の働く婦人の増大も考慮に入れると、一層の努力を要するものといえよう。

更に長時間保育を希望する母の職業：我々の調査では雇用者が67%で最も多く、とくに会社員、工員が圧倒的であるが、公務員から日雇、内職、無職まで巾が広くみられた。

関東5県(東京、神奈川を除く)は比較的、地方県的性格があるが、第8表に労働省婦人少年局の調査(1966年)²⁾をあげてみよう。

② 質的な問題
イ. 受入れ側としての保育所の問題ととくに保育士の量

第8表 職種別、希望保育時間別、学齢前の子どものある既婚女子労働者構成比
(職場以外の保育施設にあずけているもの)

希望保育時間 計	6時間未満	6	6:30	7	7:30	8	8:30	9	9:30	10	10:30	11	11:30	12	不明	
		6:30	7	7:30	8	8:30	9	9:30	10	10:30	11	11:30	12	12:30		
職種																
計	100.0	3.0	2.1	0.7	4.6	6.2	6.2	4.2	24.7	16.8	8.2	3.7	5.7	0.9	0.2	12.8
事務	100.0	—	0.1	2.3	5.5	—	2.7	9.7	7.7	15.0	20.8	5.5	10.9	5.6	1.4	12.8
販売	100.0	—	—	7.2	—	—	2.9	23.7	7.4	43.1	—	1.4	—	—	—	14.3
製造作業	100.0	—	3.6	—	5.9	8.9	7.1	2.7	23.2	19.6	0.5	6.3	8.9	—	—	13.4
運輸通信	100.0	—	13.0	—	—	13.0	—	6.5	19.5	13.0	13.4	—	—	—	—	21.6
単純作業	100.0	0.1	—	—	2.5	2.5	10.3	—	53.1	8.0	7.7	1.1	1.1	—	—	13.6
サービス※	100.0	—	—	—	—	—	—	50.0	—	—	—	—	—	—	—	50.0
専門職	100.0	18.8	—	—	7.1	9.4	7.1	—	30.7	—	17.4	—	0.1	—	—	9.4
管理職	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他※	100.0	—	—	—	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	—	—	—

(注) ※印はサンプル数が少ない。管理職は該当者なし。

労働省婦人少年局「既婚女子労働者に関する調査」1966年6月、(84頁参照)

と質の問題がある。

④ 保育の質的向上に必要な保母の定員としては3才未満6:1、3才児20:1、4才以上30:1であり、昭和44年度より、乳児保育は400人分に対し33カ所の施設で3:1をきめて発足している。

これを外国の例でみると、S. Sjölin¹⁾によると、保育の先進国である英国では、2才未満3:1、2才以上8:1、スウェーデンではすべての年令を通して5:1と保母1人当りの定数は低く、比較的保育行政のおくれているイタリアでは、1才半未満6:1、1才半~3才では12:1と高くなっているが、我が国ではまだ保母1人当りの定数は高く、これからの検討を要するものと思われる。最近乳児の定数の低下(3:1)を計った施策が小範圍の乳児保育所になされたことは、これらの問題点の解決へのいどぐちとして、大いに期待されるものといえよう。

⑤ 保母の質: 保母が保育に適格な能力を具えているか否かは、重大な問題点であるのは当然のことである。じがるに今回の調査に於ては、正しく理解されていない解答が多く、集計に困惑を感じる例が多数みられた。例えば、問1の「あなたの保育所では、児童福祉法による最低基準の8時間を何時から何時までに決めていますか?」に対して、10時間をこえるような答が多発していたが、保母の質的能力の再検討が必要なのではなからう

かと考えられた。

ロ、母側の要望としての長時間保育の問題: 勤労婦人は8時間勤務をとる例が多いから、小児を保育所へ預けてから出勤し、終ってからつれて帰るためには、8+αの時間を要するのは当然である。

⑥ 長時間保育の実態調査: ①関東5県(千葉、埼玉、茨城、栃木、群馬)でのアンケートで長時間保育を実施している保育所は、解答のあった659施設中405施設(61.5%)である。②各県による差がみられ、千葉、群馬は53%と低く、埼玉、茨城は72~75%と高率であったが、これはその施設の場所が勤務先に近いか否かによる影響が大きいものと思われる。③東京、神奈川を除外した理由: 一神奈川については、本研究のStaffの池上及び山崎がPretestをすでに行っていて、そのデータを参考にすることとした。

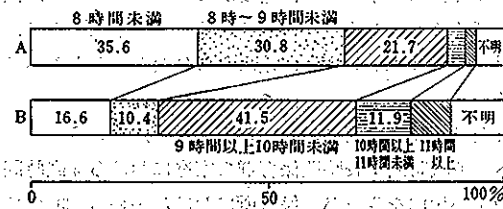
東京都については、650通のアンケートを依頼状とともに23区の区役所及び都下の各施設に分けて送付したが、都下からは比較的高率の返信があったのに反し、23区からは、2、3の区から返信があったのみで、全体が把握できないので、割愛した。

大都市での長時間保育の実態に大きな期待をかけたのにまとまった返信のない点、これから的大都市における行政の困難さと併せて、よい効果をあげうる方法を研究する必要があることを痛感した。⑦長時間保育の時間

は、9～10時間が53%と半数を占め、10時間以上と8～9時間がそれぞれ22.24%であった。

昭和41年労働省婦人少年局で行った「既婚女子労働者に関する調査」²⁾では、9時間～10時間希望者が41%、10時間希望者は11.9%で合せて9時間以上希望が53%もみられたことと関連して、長時間保育に対決せねばならない問題である。(第9表)

第9表 現在の保育時間と希望保育時間の比較



(注) A: 現在の保育時間 B: 希望保育時間
労働省婦人少年局「既婚女子労働者に関する調査」(1966年6月)83頁参考

我々が実際に3才児に各種調査したものは、この9～10時間保育が多かったが、10時間以上の例について行くべきであった。しかし、東京近郊の保育所に於ては10時間以上の例は殆んどなく、また、A、B、C、D群で、Socio-economic Status の条件を合せた組を作るのが困難で、とくに10時間以上の保育群では不可能であった。⑤ 保育先進国に於ては、保育所は大部分は12時間開放されていて、母親の Need に応えているが、我が国に於ては、この点については、今後の課題といえよう。

⑥ 長時間保育の小児の心身への影響:

① 保母の意識調査の結果、約39%が影響ありと答え、その内容は身心両面に亘って多岐である。

② また実際に行動調査や持久力や、集中力をテストした結果も長時間保育児に問題が多い傾向をみとめた。

③ 長時間保育の心身に及ぼす影響の文献は従来国内外ともみられない。

④ 従来の文献をまとめてみると、重大な影響がみられやすいのは昼夜保育の場合であり、Bowlby (1952)³⁾は幼若な乳幼児を長期間母親から分離させると、性格形成、ひいてはその小児の全生涯に重大な、しかも治りにくい影響を与えることを警告していて、Hospitalismus の研究の重要な、また最初の文献となっている。

Bowlby の研究以後、各国においても、Hospitalismus の研究が進んだ。

我が国に於ても、最近、その乳児院においても、家庭保育に近づけるように保育内容をよくした結果(二木他

⁴⁾は乳幼児の世話をする時間を増加させ、平井他⁵⁾は保母の世話をする乳児数を減らした)、乳児の知能の発達を向上させることができることも事実である。

しかし、乳児院、孤児院などの Full Nursery のもの宿命として、いかに保育内容をよくしても、家庭保育児に比べると、次の点でおとることを、保育の先進国のチェコスロバキアの Brno 大学小児科教授 M. Tomán はのべている¹⁷⁾。即ち、i) ことばのおくれ、とくに1才代以後のおくれは決定的である。ii) 情緒反応のおくれ、とくに恐れ、iii) 運動機能もやや劣る。iv) 感染は家庭児の2倍以上も多く、そのための精神的退行現象がおこりやすい。(以上は班員の1人松島が1966年にWHO Fellow として CSSR を訪れたときにきいたものである)。

しかし、Bowlby の研究対象は乳児院の如く一定期間母親と分れている場合であって、昼間保育の場にはあてはまらない。

この点では Prof Sjölin¹⁸⁾も同様の意見であり、昼間保育が幼児に及ぼす影響は少いという。

乳児院よりも保育所の方が小児に対してよい影響を与えるという文献はその他にも多くみられる。例えば、Steels H. M. et al. (1938)¹⁹⁾は孤児院にいる就学前の小児たちを毎日数時間づつ Nursery School へ通園させたら、IQ は上昇し、Control 群(孤児院に居残り組)は次第に低下したという。

Simonsen K. M. (1947)²⁰⁾は乳児院にいる1～4才の133例の小児のDQは93に対して、満足すべき状態にない家庭の小児が保育所へ通っている群は、102であったという。又 Glass (1949)²¹⁾は20～62カ月では昼間保育群では家庭保育群よりも発達段階的な問題を多く示すような傾向がみれたが、積極的に有害であるとの結果はえられなかったとのべている。

Heinicke (1956)²²⁾は16～27カ月児で保育所へ来てからの19日間の観察を行った結果、行動的には第1日は大した変化がみられなかったが、第2日の夜に大きな障害、とくに大人との接触を強く求めて、しばしば夜泣きをし、保母に抵抗し、指しやぶりがふえ、排便の失敗が多くなり、かぜをひく回数がふえたが、とくに父母と分れて乳児院に住んでいる群の方が、家庭から通園している保育児よりも強い症状を示し、とくに敵意(hostility)を強くするものが多かったという。

又、Maccoby (1958)²³⁾も働く母親の小児について、小児が日中、大きな集団で保育されないで、夕方母親にひどく無視されるのでなければ、乳児院でみられるほど心身の悪化は起らないようであるばかりか、模倣遊びを通

じてよい面が多いとのべている。

Herzog (1960)⁹⁾ の意見は興味深いものがある。即ち「精神科医や Social worker の間で強調されていることは、母親によっては、一日中母親らしく行動するよりも、Part time で相手をした方がよいものがあり、そんな母親は働かないで家庭にいて子どもの相手をする、子どもがかえって悪くなるものがある」とのべ、過保護な母親などの有害な点を指摘している。

しかし、我々の今回の調査成績が示すように9～10時間の長時間保育児群には行動異常、とくに消極的マイナス的行動が多くみられ、しかも色分け作業や片足とびテストで、退園時に低下がみられたことは、長時間保育が小児の心身にマイナス的に働いていることが推察された。

S. Sjölin¹⁾ も「小児は必要以上に昼間保育所にいるべきではない。母親はできる限り早く子どもをつれて家へ帰るべきである」とのべているのは、小児保育の真の姿を示しているものといえよう。

㊦ 罹病傾向については、長時間長期保育児にやや多い傾向がみられたが、有意差はみなかった。家庭児と保育所児の罹病傾向を対照した報告は多くみられるが、その殆んどが家庭よりも保育所での感染率の高いことをのべている。特に、伝染性疾患及び上気道感染(かぜ)

の多発である。(Hesselvik (1949)¹⁰⁾ Löfsfröm (1951)¹¹⁾ Trautmann (1960)¹²⁾ Drillien (1961)¹³⁾ など)

更に、K. Kubat¹⁴⁾ は3年間の保育児と家庭児との罹病傾向を follow-up した結果(6～36 カ月間の観察により)、保育所児の方が家庭の2倍の罹病率を示し、(その70%は気道感染)、保育所に入った直後には罹病が多いが、半年すぎると罹病率は低下してくる。これは、乳児、1才、2才、3才と年齢にかかわらず入所して半年間は多く罹病するとのべ、免疫ができるから罹病が減少してくるのであろうとのべている。この罹病には、Socio-economic status に差はみられなかったとのべている。

また身体発育は両群の間に差はなかったという。

㊧ 睡眠時間：長時間保育群で家庭における睡眠時間が短い傾向をみたが、保育所における午睡を加えても、まだ不足するようならば、10時間以上の本格的長時間保育を行う場合には、小児の睡眠を充分とする方策と指導が大切となろう。

以上、我々の調査結果は、長時間保育は幼児の心身にマイナス面の影響がみられたが、例数が少ないこと、長時間保育の定義の中では、9～10時間という比較的短いものであった点が問題になりうと思うので、今後この点につき、更に検討を加える必要があると考える。

V 結

長時間保育を行うことが、幼児の心身にどのような影響が現われるかを知るために、調査を実施し、以下の結果を得た。

1) 関東5県における長時間保育の実態調査成績(埼玉、千葉、茨城、群馬、栃木、計5県)：

① 8時間の基準をこえて行っているものは、解答した659施設中405施設(61.5%)であり、最高は埼玉、茨城の72.75%から、最低は千葉、群馬の53%に分散している。

② 長時間保育児は、405施設中4910名で1施設当たり平均12.1名で、施設定員数の9.3%を占めるが、県別に差がみられ、埼玉、茨城(14.1人、12.2人)では高く、千葉、栃木(6～8%)に低い。

③ 長時間保育児の時間的分析：9～10時間が53.3%と多く、ついで8～9時間が24.4%、10時間以上が22.3%であり、とくに、10時間以上の保育は3才未満児に多く(27.2%)みられる。(3才以上児21.0%)

④ 母の職業は、雇用者が多く(67%)、その中でも、とくに会社員、工員が圧倒的であるが、公務員から日

論

雇、内職、無職まで巾が広い。

⑤ 保育内容は、自由遊びが50%以上を占め、TV、絵本などをみせるものが20%であったが、条件を整えた一斉保育(お話し、紙芝居、ゲーム、絵画製作など)は10%にすぎなかった。

⑥ 保母の主観による長時間保育の影響の有無：

④ 返信のあったアンケート807通のうち、長時間保育が小児に影響ありとしたものは313通(38.8%)影響なしとしたものは269通(33.3%)解答なし225通(27.9%)であった。

⑤ 問題ありの内容：延べで約100項目に亘り、抽象的な表現では欲求不満、情緒不安定(各々25づつ)が多く、具体的なものとして最も多くあげられたものは、淋しそう(56)、甘える(50)、落ちつきがない(49)、乱暴する(39)、よく泣く(33)、いらいらする(25)である。

2) 幼児の行動調査：

① 各群間の差を比較すると、A、D群間にその差が最も強くみられた。

② その内容は「ぐずる」、「すねる」、「消極的であ

る。「いじわる」「他人の注意をひきたがる」「我がつまい」「けんか早い」「きまづき子どもとしか遊べない」「独占欲が強い」「我慢強くない」「協調性にかける」の11項目である。

即ち、有意差のある項目は何れもマイナスの意味をもつ行動面にみられ、プラスの意味の行動面では「片づけをよくする」の1項目にすぎなかった。

3) 幼児の疲労調査：

① 片足とび

④ 長時間保育児群（A、B群）に於ては、登園時よりも退園時の片足とびの機能低下がみられた。

⑤ 退園時の機能低下の程度は、A群に著しくみられるのに反して、機能が著しく上昇しているのはD群であり、B、C群は、この中間の値を示した。

このことは、持久力と集中力を要する片足とびに於ては、長時間保育の影響が比較的明らかにみられたものと考えでよいと思うが、更に、例数を増して検討を行う必要がある。

② けんすいの持続時間

けんすい持続時間は個人差が大きく、運動機能の指標にもなりにくいといわれる。しかし各群間に、登園時と退園時との間の差が多少みられるが、長時間保育との関係はみられなかった。

③ 色分け作業

④ 登園時と退園時の差は、各群間にはみられなかった。

⑤ 作業完成の見地からすれば、登園時において、C、D群が完成例が多く、反対に、A、B群は少なかった。

⑥ しかし、退園時に於ては、A、B群では登園時と同じ成績であるのに反して、C、D群では、完成例が減少していた。

このことは、短時間保育児では退園時で機能低下（集中力低下）があっても、帰宅によって代償されるが、長時間保育児では、コンスタントに集中力の低下をきたしているものと考えられる。

4) 幼児の家庭におけるタイムスタディ調査：

上記症例について、保育園を出て、翌朝登園するまでの間に現われると思われる幼児の生活様相と母親の態度を夫々44、46項目あげて調査した。

8時間保育と、9～10時間保育との間には明らかな差はみられなかったが、長時間保育群の母は他の群より密接な接触をもつようにつとめる傾向がみられた。

しかし、家庭における睡眠時間は、A、B群では9時間、C、D群では10時間のものが多く、保育所における午睡を入れても、長時間保育児では睡眠の不足すると考

えられる例が多くみられた。

以上のことから、9～10時間という比較的短い型の長時間保育群に於ては、幼児の行動調査面でのマイナス的行動が多く、しかも、色分け作業と片足とびという集中力と持久力を要するテスト面での機能低下がみられたが、その原因は睡眠不足とそれによる疲労の蓄積をきたしている例がみられると考えられた。

しかし、これらについては、例数が少ないこと、及び、10時間以上の症例がないことが問題となるので、この点につき、更に検討を行う必要があると考える。

【文 献】

- 1) S. Sjölin : Care of Well children in day care. Centres: WHO. Public Health Papers; (24)
- 2) 労働者婦人少年局：既婚女子労働者に関する調査 1966年6月84頁
- 3) J. Bowlby : Maternal care and mental health : Geneva 1952 : (WHO : Monograph series No. 2)
- 4) H. M. Steels, et al : A study of environmental stimulation : An orphanage preschool project : Iowa stud. child. Welfare 15, 4, 1938
- 5) K. M. Simonsen : Examination of children from children's homes and day nurseries : 1947. Copenhagen—3) の Bowlby の中 68頁
- 6) N. Glass : Eating, Sleeping, and elimination habits in children attending day nurseries and Children cared for at home by their mothers : Amer. J. ortho psychiat. 19. 697. 1949
- 7) C. M. Heinicke : Some effects of separating two-years-old children from their parents : A comparative study, Hum. Pelat. 9. 195, 1956
- 8) E. E. Maccoby : children and working mothers : children. 5, 83, 1958.
- 9) E. Herzog : children of working mothers : washington D. C. Government Printing office (children's Bureau Publication No. 382) 1960
- 10) L. Hesselvik : Respiratory infections among children in day nurseries : Acta. paediat (Uppsala) Suppl 74 1949
- 11) S. Löfström (Sweden) 1951—1) より引用
- 12) J. Trautmann : Vergleichende Untersuchungen der Morbidität in Tages, Wochen und

- Dauerheimen für Kinder in Alter von 6 wochen bis zu 6 Jahren : Kinderärztl. prax. 28 399, 1960
- 13) C. M. Drillien : A longitudinal study of the growth and development of prematurely and maturely born children. VIII. Morbidity in the age period 2-5 years : Arch. Dis. chidh. 36, 515, 1961
- 14) K. Kubat and A. Syrovatka : Die Entwicklung der Morbidität bei Familien- und bei Krippen Kindern während der ersten 3 Lebensjahre : Arztl. Jugend K. 57, 16~23, 1966 (Zentralblatt f. Kinderh. k. Bd. 100, Heft 6, 561, 1966)
- 15) 二木武他 : ホスピタリスムとその現状について : 小児科診療, 28巻12号, 1572-1584, 昭40年12月
二木武、鶴田郁代 : 乳児院における発達管理につ
- いて : 東京都衛生局学会誌 No. 33 昭39年5月
- 16) 平井信義、千羽喜代子、吉岡毅、梅森公代 : 保育所における乳児保育実施上の諸条件に関する研究 : 昭41、42年度、厚生科学研究
- 17) 松島富之助 : チェコスロバキアの乳児施設の現状 : 乳児保育9号、1頁、昭42年5月

参 考 論 文

- 1) シンポジウム : 現代における保育所の意義と役割
—長時間保育を通じて—
社会福祉研究 4号、24-45頁 1969
1. 施設における長時間保育の諸問題 : 藤田照子
2. 教育の立場からみた保育問題 : 持田栄一
3. 働く母親と子供の権利 : 一番ヶ瀬康子
4. 現代における保育所の意義と役割 : 上記3氏の
Discussion

Study on How Long-Hour Nursery Care exerts Influence upon Children's Mental and Physical Development

Dept. 3 Tominosuke Matsushima

Dept. 7 Yukie Noda

Collaborated by

Kiyo Ikegami, Mizue Kamo

Toku Suzuki, Tazuko Yamazaki

We made the following investigations to study how long-hour nursery care exerts influence upon both mental and physical development of children.

1) Investigation into the actual status of long-hour nursery care in 5 prefectures in the Kanto Districts (Saitama, Chiba, Ibaragi, Gumma, Tochigi) by questionnaire :

① Returned answers—63% on an average (77.3%~44.7%)

② Of 659 day nurseries that returned the answers, 405 day nurseries were caring children longer than the standard 8 hours (61.5%), Saitama and Ibaragi showing the highest percentages (72.75%), Chiba and Gumma showing the lowest (53%).

③ The number of children being cared for long hours at 405 day nurseries was 4,910, that is, 12.11 children per one nursery on an average, and held 9.3% of the fixed number of the day nurseries.

④ Nursery care hours: 9~10 hours—53.3%, 8~9 hours—24.4%, more than 10 hours—22.3%.

⑤ Nursery teachers' subjective views as to whether long-hour nursery care exerts influence upon children or not :

⑥ Of 807 teachers who returned the answers, 313 teachers (38.8%) stated that the long-hour nursery care exerts some influence upon children, 269 teachers (33.3%) answered there is no influence and 225 teachers (27.9%) gave no answers.

⑦ Items checked by nursery teachers as problems : problems expressed in the abstract—frustration, emotional instability (25 each), problems expressed in the concrete—looks lonely (56), fawn upon (50), restless (49), act in an unruly manner (39), cry often (33), be in a fret (25).

2) Investigation of Children's Behaviors :

The subject groups investigated were :

Group A (Children receiving long hour nursery care more than 2 years).....11 cases

Group B (Children receiving long-hour nursery care less than 1 year).....11 cases

Group C (Children receiving ordinary nursery care more than 2 years).....10 cases

Group D (Children receiving ordinary nursery care less than 1 year).....15 cases

① Marked difference was seen between Group A and Group B.

② Significant difference was seen in the following 11 items considered as minus (—) behaviors“fret”, “pout”, “passive”, “cross”, “want to attract the attention of others”, “obstinate”, “quick to quarrel”, “play with only a regular friend”, “monopolistic”, “impatient”, and “not cooperative”... and only in one item considered as plus (+) behavior.....“put things in good order”.

3) Investigation of Children's Fatigue :

① Jumping on one leg

② The children of Groups A and B showed more lowering of function at the time they were leaving the nursery than at the time they came to the nursery.

③ The children of Group A showed remarkable lowering of function at the time of leaving the nursery, those of Group D showed marked rise of function, and those of both B and C Groups showed the medium value.

② Duration of exercising on a horizontal bar :

No difference was seen among the groups.

③ Color sorting work :

④ The difference in work between "at the time of coming to the nursery" and "at the time of leaving the nursery" was not seen among the groups.

⑤ From the view-point of "work completion", many children of C and D Groups completed the work at the time when they came to the nursery, on the contrary, a few children of A and B Groups completed the work.

⑥ The children of A and B groups showed the same result both at the time they came to the nursery and at the time they were leaving, but less children of C and D Groups completed the work at the time of leaving.

4) Investigation of how children are cared at home :

We investigated the life phases of the children (above-mentioned subjects) and their mothers' attitudes seen during the period from the time children left the nursery till the time they went to the nursery the next morning again, listing up 44-46 items respectively.

No evident difference was seen among the children having 8-hour nursery care and 9~10 hour care, but the mothers of the children having long-hour nursery care showed the tendency to keep in touch with their children more closely than the mothers of other groups.

Sleeping hour at home was : A and B Groups 9 hours, C and D Groups most children sleep for 10 hours. There were many cases of insufficient sleep among the children having long hour nursery care even if the hour for a nap was included.

The fact that in the group of semi-long-hour (9~10 hour) care, many minus behaviors were observed in the investigation of children's behaviors, and the lowering of function was seen in the color sorting work and jumping on one leg which require concentrating and staying powers is considered due to the insufficient sleep and fatigue resulted from it.

However, since the cases were small in number and there were no such cases in the group of having nursery care more than 10 hours, we think we need to make further investigation into this point,